

堀江敏幸「熊の敷石」論

— 現代における人間関係のあり方 —

A Study on “Kuma no Shikiishi” by Toshiyuki Horie

— What Our Modern Human Relationship Should Be —

宇野憲治

Kenji UNO

An island with a monastery becomes one with the land at low tide, and separates from it at high tide. This landscape may sound only natural, but it is a symbolic one in respect of human relations. We isolate ourselves from other people when contented, but seek to connect to them when lacking something. This can be exactly what human relationships are about.

Our modern world needs relationships in which we keep a distance from each other. The ideal relationship is symbolically described by the relation of the monastery island to the coming and going of the tide.

一 選者の批評

郎・宮本輝・村上龍の十名である。賛否相半ば、三時間の討議の末やっと決まった作品である。それぞれの選者の選評を見ておく。

堀江敏幸「熊の敷石」は、百二十四回（平成十二年度下半期）芥川龍之介賞を受賞した作品である。選考委員会は、平成十二年一月十六日午後五時から、東京・築地の「新喜楽」で開かれた。選考委員は池澤夏樹・石原慎太郎・黒井千次・河野多恵子・田久保英夫・日野啓三・古井由吉・三浦哲

青来氏以外の作品は私には論ずるに足りないものにしか思えなかった。

（石原慎太郎）

もうひとつの受賞作、堀江敏幸氏の「熊の敷石」を私は積極的には推せなかった。作品の主題なのかどうなのか、熊の敷石なるものも、私には別段どうといったことのないただのエスプリにすぎないのではないかと、いう感想しか持てなかった。

ただ、三島賞を受賞した「おぼらばん」にも感じた細部の丁寧さは、たとえば小さなタイトルで熊のモザイク画を構築しようとして、出来あがってみると熊ではなく無数の熊の手だらけの絵になっていたという思いもかけない手柄へとひきあげる技につながっている。堀江氏が無意識のうち、その技をつかんでいるとするならば、それは得がたい資質である。

(宮本 輝)

堀江敏幸さんの「熊の敷石」は言ってみれば破綻だらけだ。エッセーから小説になりきっていない。細部がゆるい。タイトルに魅力がない。

しかし、内奥にはなかなか凄いいものがある。ヨーロッパ人の思考法の精髓をさりげなく取り出して並べる手つきがいい。軽い展開の中に重い原石が散りばめられている。かここではアウシユビッツが避け得ない思想の課題として今も居坐っている。語り手が拙いフランス語を話すために相手の方が限られた語彙でついつい本音を言ってしまうというからくりもおもしろい(それでも、熊の敷石ほどの打撃は与えていないだろう)。

こういうものをありがたがるのは日本人のヨーロッパ・コンプレックスだという意見があったがそれは逆。もうヨーロッパに学ぶものはないと言いつ張る心理がヨーロッパ・コンプレックスである。(池澤夏樹)

堀江敏幸さんの「熊の敷石」は、とても推せなかった。嘗ってフランスに留学し、今は日本でフランス文学関係の仕事をしている「私」が久しぶりにフランスへ赴き、ユダヤ人の友人とノルマンディ地方で一両日を過ごした話だが、彼等の会話、幾つものエピソード、食事や風景のこと、いずれもエスプリもどき、知性まがいの筆触しか感じられない。「私」のような閑歴であるらしい作者がそういう自分を直接に当てにして「私」を書いているからだろう。例えば、娼婦が娼婦を書くのはよいが、書き手は娼婦である自分を裁ち切った眼と姿勢をもたなくては創造性は生まれない。

(河野多恵子)

堀江敏幸氏の「熊の敷石」は隙のない堅固な文章が印象的であった。これは散文としてごく上等なものだといっていだらう。けれども、欠点のない、どこからも文句のつけようのない立派な散文でも、それが必ずしもそのままよい小説の文章になるとは限らないのだから、厄介である。私はエッセー風の小説も嫌いではないが、この作品はあまりにもエッセー風で小説としての魅力に乏しかった。小説の文章には、もうすこし艶と色彩と体温がなければならぬ。取り澄ましてばかりもいられないのである。

(三浦哲郎)

今回の候補作品は総じて水準に達したものはかりであった。

今回堀江敏幸氏の「熊の敷石」のような派手でもどぎつくもない静かな短篇が、第一回投票から最高点を集めて逃げ切ったことに、毎朝の新聞社会面を眺める限り、いまやどうしようもなくあられもなくなつたこ

の国にも、静かな知恵の言葉に耳を傾ける人たちも確かにいるのだ、と感動に似た気分を覚えたりした今回の選考であった。

「熊の敷石」は日本とフランスの繊細で孤独な若者ふたりが、フランスの田舎町で久しぶりに再会して、とりたてて事件もない短い時間を過ごす、という内容だが、よく見ると、ファシズムの暴力が全欧州を荒れ狂った時期、とりわけユダヤ系の家族たちに破滅的な体験を余儀なくさせ、その後遺症で、家族的体験の継承が寸断されもしていることや、隣家には眼球のない障害児を生んだ女性が、両目の部分を糸で十文字に閉じた熊のぬいぐるみをその子に作り与えていることや、それらの事実がかきたてるラ・フォンテーヌの熊の寓話や、近くの町出身の大国語学者の逸話や、その他人間の心のゆがみや人間同士の関係のずれで偏光する精神の微妙な光も射しこんでいて、緻密に感じとるとなかなか複雑で不気味でさえある非凡な作風なのであった。

(日野啓三)

堀江敏幸氏の「熊の敷石」は、かつて留学生生活を送ったフランスを再訪した主人公が、当時の友人にノルマンディー地方の小さな村で再会する話である。その友人がユダヤ人であったためもあり、彼の家族を巡る話題に登場する人物達が、いずれも民族としての重い歴史を引きずって現れて来る。そのことに対する違和と友人への親しみの感情が入り混る中から、というよりむしろ違和感を介して抱く親近感によって、人と人との関りの内にある微妙な温もりを知的な言葉で刻み込もうとした大作品であるといえよう。民族の歴史の孕む必然と個々の偶然との織り成す人間の生の光景が、幾つものエピソードを通して浮上する。戦争を背景

にした悲しみが、目の見えない子供を持って離婚した隣家の女性の姿のために、俄に別の光を当てられる末尾も印象的である。(黒井千次)

「熊の敷石」は、人がどこそこに在る、住まう、あるいは滞在する心において、二人の間でも交差のしようもないズレがある。いや、むしろ驚くべきはそれでも時折話の通るといふことだ、と感じさせる作品である。

(古井由吉)

今回は最終的に、物語づくりに徹して、描きぬこうとする作品と、それをあえて底に沈めようとする作品が残った。つまり受賞作の「聖水」と「熊の敷石」である。

堀江敏幸氏の「熊の敷石」は物語の劇的な素材を含みながら、それを極力、底へ抑えている。パリで原書の要約の仕事をする「私」が、ユダヤ系の友人ヤンとノルマンディーの小村に行くはなしたが、ヤンともその小屋の家主のカトリーヌとも、衝突することもなければ、融和が深まることもない。しかし、親しみは微妙に持続して、切れることもない。安易な虚構のなかの人物の対立や波乱と違い、私たちの卑近な日常では、個人と個人の関係には、多くこういう言葉に置き換えがたい契機が働く。それが宮澤賢治の初期童話で、「貝の火」の宝珠が輝き、消滅するようなものとして、終始作中で見つめられている。

ヤンにしてもそのユダヤ人の家系は、ナチスの強制収容所の過去を背負い、祖母の親族十六人のうち生き残った者は四人。そうした過去は迫害への批判でもなく、ただ事象として示し、かえってヤンの漂泊の生活

に濃い影を感じさせる。しかし、エミール・リトレなどへの記述は、あまりに知的傾斜がすぎ、ときに廻りくどい文脈も見えて、欠点もあるが、私は小説への一つの活路を願って、これを推した。(田久保英夫)

受賞作の『熊の敷石』は、候補作の中で二番目に好きな作品だった。他者とのコミュニケーションというのは簡単ではない、ということを作者は描いているのだと判断した。フランスが舞台で、主人公以外はフランス人なので、選考会ではペダンチックだという批判が出たが、ノルマンディーの田舎の描写に好感を持った。コミュニケーション不全という普遍的なモチーフが、ペダンチックに単純に墮落するのを、かろうじて防いでいる。ただ冒頭の夢のシーンは不要なのではないかと思った。

(村上 龍)

以上の通りである。反対または賛成しかねるという選者が五人(石原慎太郎・宮本輝・池澤夏樹・河野多恵子・三浦哲郎)、賛成の選者が五人(日野啓三・黒井千次・古井由吉・田久保英夫・村上龍)という結果である。私は賛成の立場で、日野啓三の「人間の心のゆがみや人間同士の関係のずれで偏光する精神の微妙な光」・黒井千次「違和感を介して抱く親近感によって、人と人との関りの内にある微妙な温もりを知的な言葉で刻み込もうとした大作品」・村上龍「他者とのコミュニケーションというのは簡単ではない」等の意見に近く、「現代における人間関係のあり方」を描いた作品であると考えている。

二 夢と現実

次の文章は、「熊の敷石」冒頭の夢の場面である。

いつのまにか迷い込んだらしい陽の落ちる直前の薄暗い山のなかで、突然、人工芝みたいにく、ところどころへんに骨張っていて、しかも同時にやわらかい不思議な下草が敷きつめられている道に出た。近くに獣道もあるのか、ほのかな生き物の匂いと体温すら感じられるこんな場所におつかったのはまさしく不幸中の幸い、疲れ切つて言うことをきかなくなっている脚でもなんとか前に進めそうだし、最悪の場合このあたりで火を熾こして一夜を過ごそう。そう心に決めた瞬間、地面ぜんたいが巨大な黒い毛虫の絨毯みたいにざわざわうごめいて足もとをすくわれ、尻餅をついた身体を間断なく突きあげる褶曲運動がはじまったので、私は恐怖と驚きのあまり疲労も忘れて木々のあいだをやみくもに走り、気がつくくと小高い岩場に駆けあがっていた。肩で息をしながらほんの数刻前まで楽園のように感じていた草場を見下ろすと、あのやわらかい真っ黒な道に大きな瘤が突き出て奇岩城と化し、さらに目を凝らせばおびただしい数の熊が両の脚でたちあがったまま身体を寄せあいへしあい帯状に連なって山の奥へ移動しているではないか。なんとということだ、私は熊の背中を踏んでいたのだろうか。…(中略)…

水が飲みたい、なにか冷たいものが欲しいと周囲を見まわしたところ、ほんの少し下の岩肌にできた亀裂からひよろひよろ流れ出している湧き水が目に入り、おぼつかない腰つきでその泉へしゃがみこんだ。ところがそれを両手で掬い、ひと息に口に入れたとたん、とろけるような甘み

と冷たさが口腔の奥を突き刺したのである。ずっと放置してきた虫歯が不意打ちをくらって悲鳴をあげ、私はざわざわとうごめいている熊の絨毯も喉の渇きも忘れてうずくまり、激しい痛みを堪え忍ぶほかなかった。

…(中略)…

夢とおなじように右の奥歯がうずいた。

何とも奇妙な夢である。疲れ切っている時、人は安心できる場所を無意識に求める。夢の中で私がたどり着いた絨毯の上のような居心地良い場所、無意識だからこそ安心できた場所である。疲れ切って、やっと落ち着き場所を得たと思った瞬間、すべてを覆すような「恐怖感と驚き」、安全だと思っていた場所は、実は熊の寝ている集団の上であり、一番不安定で危険な場所だったのである。疲れ切って思考停止したものが落ち込む陥穽なのである。知っておれば絶対に近づかない場所であるにもかかわらず、知らないがゆえに、すなわち暗夜であったがために、その場所に一時憩うのである。疲れ切っているときには、自分のことしか考えることができず回りが見えない。一時的な安らぎを得たとしても、そこがいつまでも安全な場所であるかどうかはわからない。「熊の敷石」の冒頭におけるこの夢は、まさにその無意識の安全、つかの間の安全を象徴的に表現している描写である。安らかに眠れると思っていた場所が、見えていなかったために一番危険な場所だったのである。一番いい所・安全な所と思っけていても、実際には一番危険な場所であることが多い。見えないが故に知らないが故に、無意識のうちに危険な場所に近づいてしまう。これが最も危険なことである。最悪の場合、命を落としてしまう。この場合、その危険に気づき逃げたために命は助かったものの、もし気づかなかつたり気付くのが遅れた場合には、

命を落としてしまう。熊の上に眠るといのは夢の中の出来事であったのだが、歯の痛み、この痛みによって、夢から現実へ引き戻されることとなる。この歯の痛みは、冒頭部と末尾部に描出されている。夢の中の恐怖はどうしようもないが、やっと抜け出したと思った瞬間、歯痛によって夢から現実に戻されてしまうのである。

この冒頭の夢の場面は、最後尾の場面とも呼応している。ヤンの近隣の家族、カトリーヌと家族のような長閑な午後ひとときを過ごしている場面である。カトリーヌの焼いた自家製のタルトを一切れ口に入れたとたん、私は顎がはずれるような痛みで襲われるのである。その瞬間、記憶がパリ郊外に飛び、ヤンとの最初の出会いについて思いを馳せるのである。ヤンとペタンク投げの会場で出会った帰り、ヤンの家に立ち寄り、ヤンの手になるパイを御馳走になるが、その時も同様の歯の痛みで襲われるのである。

夢と現実と回想を錯綜させることにより、この痛みが現実のどうしようもない感覚として表現されている。一番安心し切っている時、夢または想いというものは痛みを伴うことによって、現実を引き戻されてしまう。痛みが、特に歯の痛みというものは思考能力を停止させてしまう。痛みというものは、平静さを失わせ現実感覚をまひさせると同時に、現実というもの嫌というほど知らされる。痛みというものは現実感覚を覚醒させるものであるが、この痛みを和らげるのが良い人間関係であり、宗教であり思想である。しかし、それを得ることによって、その痛の部分のみを解決したとしても、人間社会の中では根本的な治療とはならない。冒頭の部分には、疲れ切って、どこか現実と離れた夢心地のような想いが描かれているが、それが歯の痛みによって、すべてを現実へと化している。タルトを

食べようとするときの気持ちは、平和で安心した幸福感に満ちているが、食べようとした途端、歯の痛みを感じ、それが食べられなくなる。安心感というものが痛みによって壊されてしまう瞬間である。人間関係においてもこれと同じようなことが言える。安心した時が、実は一番危険なときなのである。友人と親しくなり安心を得れば得るほど、深く相手のころころに入ろうとすればするほど、友人と乖離する危険性を孕んでいるのである。

三 貝の火

「熊の敷石」には、宮沢賢治「貝の火」を意識した表現が三カ所出てくる。そして、この「貝の火」を通奏低音としながら、ヤンと私の人間関係が浮き彫りにされている。

彼の言いたいことは、それこそ「なんとなく」わかるような気がした。私は他人と交わるとき、その人物と「なんとなく」という感覚に基づく相互の理解が得られるか否かを判断し、呼吸があわなかった場合には、おそらくは自分にとって本当に必要な人間ではないとして、徐々に遠ざけてしまうのがつねだった。ながくつきあっている連中と共有しているのは、社会的な地位や利害関係とは縁のない、ちょうど宮沢賢治のホモイが取り逃がした貝の火みたいな、それじたい触れることのできない距離を要請するかすかな炎みたいなもので、国籍や年齢や性別には収まらないそうした理解の火はふいに現われ、持続するときは持続し、消えるときは消える。不幸にして消えたあとも、しばらくはそのぬくもりが残る。

(432)
ヤンの個と私の個は完全によつかつていないのかもしれない。「なんと

なく」接触する部分があっても、そこから先の衝突が起こっていない以上、私が大切に思ってきた貝の火は、種類をたがえて燃えていたのかもしれない
(446)

話す必要のないことを「なんとなく」相手に話させて、傷をあれこれさらけ出させるような輩は、素知らぬ顔の冷淡な他人よりも危険な存在なのではないだろうか。ヤンとのあいだに、いまでも小さな貝の火を共有しているという想いが私にはある。ヤンのほうでもそれに似たような譬え話をしてくれたことがあるから、こちらの存在が鬱陶しさや不快感を催させているわけではないだろう。
(456)

いずれも、ヤンと私の関係における距離のとりかたに關しての叙述の箇所である。これらの文章には、共通して、「なんとなく」という、無意識的な「感覚に基づく相互の理解」が見て取れる。その無意識的な理解を繋ぐものとして、「貝の火」が象徴的に用いられている。

宮沢賢治「貝の火」という作品は、本来、生命の尊厳ということがテーマである。ホモイという兎の子が、川で溺れかかっていたひばりの子を助ける。ひばりの子の命を助けたことにより、鳥の王様から「貝の火」をもらう。「貝の火」は龍神の珠のようなもの（オパールがモデルという説がある）であり、その中で青白く火は燃えつづけている。ホモイは無心にひばりの子の命を助けたのであるが、「貝の火」を得ることによって、みんなから褒めそやされ、次第に慢心を抱くようになる。「貝の火」を持っていることにより、みんなが畏敬の念をもって近づいてくる。自分では意識しないが、その「貝の火」の素晴らしさに他の動物たちが寄ってくるのである。このことによつて、ホモイはますます慢心を抱く。慢心を抱くことにより、純

粹無垢な心が次第に麻痺し、狡賢く近づいてくる狐に誘われて、罪の意識もなく悪行を重ねていく。そしてついには、他の動物の命を傷つけてしまうことになる。すると、その時まで燃えていた「貝の火」の炎は消えてしまふ。命を助けるということは最大の善行であり、命を傷つけるということは最大の悪事である。仏教でいえば殺生の罪を犯したことになる。最後には、「貝の火」はただの白い石となり、目の前で砕け散ってしまう。ホモイは失明し、砕けた石はどこかに飛んでいってしまう。

「貝の火」が消え、ホモイが失明したのは、ホモイ自身が無意識にはあるが、他の動物の命を傷つけたことによってもたらされた必然の結末である。慢心が起こったとき「貝の火」は次第に薄れていく。ここで重要なことは、他の命を助けるか、他の命を傷つけるかということである。命を助ければ、「貝の火」は燃え盛り、命を傷つければ「貝の火」は消えてしまうのである。

注意しなければならないのは、燃える「貝の火」を胸中に抱いていると言ふことは、一面、喪失の危険性をも孕んでいるということである。本文中に、「話す必要のないことを」「なんとなく」相手に話させて、傷をあれこれさらけ出させるような輩は、素知らぬ顔の冷淡な他人よりも危険な存在」とあるが、まさに、親しいからといってむやみと人に近づくことは、他人が近づくよりも、一層危険な存在なのである。夢の中にあつたように、疲れ切つて居心地良い場所を求めたところ、そこは熊の背の上であつたように、一番危険な場所でもあることが暗示されている。「なんとなく」わかる、「なんとなく」接触する、「なんとなく」相手に話させる無意識の内に、真の人間関係を損なわせる大いなる危険が潜んでいるのである。

人間関係においても言えることである。自分では傷つけているつもりはないが、結果的には人を傷つけているということがよくある。悪い仲間にもそのかされることによって、自分では気づかないうちに悪いこととしてしまふということが起こってくる。悪いと思えば自分自身引き返すか改めるかすることができる。気づかないために、どんどん悪い結果を生むことになる。そして最悪の場合、他人の命を傷つけてしまふという結果になる。自分が慢心を抱くことによって見えなくなってしまうことが多く、最悪の場合、精神的にも肉体的にも、周りの人を傷つけてしまうのである。

「熊の敷石」の中で、私によって何度か「貝の火」が意識されている箇所は、ヤンと私、まさに、人間関係における親しさとその危険性について思考を巡らすところなのである。

四 ヤンと私

ヤンと私の出会いは、「十数年前の晚い秋の日曜日、パリ郊外の公園の一角」である。ペタンク投げをしていたヤンの投げ方があまりにも見事であつたので、昼食会で彼に話しかけ、たどたどしく賛辞を述べたのが、ヤンと私の付き合いの始まりであつた。まことに奇妙な場所での奇妙な出会いである。クマが敷石を投げるといふ場面が後に出てくるが、この出会いの場面はその伏線となっている。

ヨーロッパ社会で嫌われているのはユダヤ人と東洋人である。ヤンはユダヤ人であり、私は東洋人である。どちらも、ヨーロッパ人の目から見れば、差別の対象となっている。その意味では二人とも、ヨーロッパ社会においては孤独な存在である。

あの頃はヤンのほうも独り暮らしをはじめたばかりで、いろいろな気負いもあったのだろう。互いの緊張感が最初に引き合う契機になったことはまちがいないし、そうでなければいきなりユダヤ人街へ食事に行くなどとは言わなかったはずだ。最低限のユダヤ色が出るようなサンドイッチを食べさせてやるからいっしょに来いと、なんだか新興宗教の勧誘みたいな口振りで半分は強引に誘われたかたちだったが、当時は彼がユダヤ人であることを知らなかったし、土地勘もなかったから、なぜそんな界限につれて行かれるのかさっぱり理解できなかった。(431)

今日はばくのおごりだとヤンが金を払ったとき、背後に立っていた私は、彼が大きな缶詰を驚掴みにした左手を背中にまわしているのに気づいた。外に出てから問いただしてみると、ははんと鼻先を夜気に突き出して得意げに笑い、盗んだにきまつてるだろ、と言う。

「ほかの物にはちゃんと金を払ったじゃないか、これだけ盗んだっていいのかわか？」

「払ったのは安いものばかりさ、これはとてもぼくの持ち金じゃ買えない品だ」

彼が黙って頂戴してきたのは、葡萄の葉で米を包み、香辛料とオリブオイルに漬けて缶詰にした保存食で、印刷されたラベルは見えたものの、金も払わずに失敬してきたと知って動転していた私に商品名を記憶する余裕などありはしなかった。そのころ私は、生活に必要なありとあらゆる事務手続きに失敗し、少しでも不利な状況に陥るような事態は徹底して避けようと敏感になっていたので、かりにそんな事態が露見して関係を取りざたされることになつたらまずいと自分勝手に怒りを鎮めるの

に苦勞していたのだが、あまりに堂々とした万引きだったので、なにも抵抗できず、ただついていくことしかできなかった。(432)

二人は出会ったその帰り、ユダヤ人街に行く。ヨーロッパ社会においてはヤンも私も差別されている存在であるが、迫害の歴史をもっているユダヤ人のヤンの方が人間関係においては警戒心が強い。ヤンは私をユダヤ人街に連れて行き、ユダヤ人の食べ物を食べさせる。また、ユダヤ人の街において買い物したとき、ヤンはスーパーから缶詰を盗むのである。ヤンあまりに見事な盗みに、私は知つていながら見て見ぬふりをする。その場ではやり過ぎ、あとで注意をするが、そのことによってヤンと私はよりいっそう親密になる。それはヤンの私への試しであったと思われる。私が信用出来る人間であるかどうかを試すヤンの方法である。しかし、私は試されたということはあまり意識してない。

以後、ヤンと私の付き合いが始まるが、べつたりとした付き合いではなく「なんとなく」といったような付き合い方である。あまり深入りするわけでもなく、また離れてしまうわけでもない、淡々とした付き合い方である。ヤンの生活についても興味は示すものの深入りはしない。私のことに關しても、ヤンはよく面倒をみるが強制的であつたり、お節介をやくものではない。次に挙げるような「なんとなく」といった接し方である。

彼の言いたいことは、それこそ「なんとなく」わかるような気がした。私は他人と交わるとき、その人物と「なんとなく」という感覚に基づく相互の理解が得られるか否かを判断し、呼吸があわなかった場合には、おそらく自分にとって本当に必要な人間ではないとして、徐々に遠ざけてしまふのがつねだった。ながつきあっている連中と共有しているの

は、社会的な地位や利害関係とは縁のない、ちょうど宮沢賢治のホモイ
 が取り逃がした貝の火みたいな、それじたい触れることのできない距離
 を要請するかすかな炎みたいなもので、国籍や年齢や性別には収まらな
 いそうした理解の火はふいに現われ、持続するときは持続し、消えると
 きは消える。不幸にして消えたあとも、しばらくはそのぬくもりが残る。

もつとも「なんとなく」の一語は、発する人の体温によっていかように
 も使える便利な道具かもしれず、少なくとも私は彼にとつてなんの計算
 も計算も成り立たない白紙の存在だったから、ある種の油断もあっただ
 ろう。しかしこの「なんとなく」人を選んで家族の話をしてしまう態度
 と缶詰を盗んだときの堂々たる演技は、どこかつながっているとの感触
 が私のなかにはあった。ヤンを信用しようと思ったのはそのときからだ。
 背中にまわした缶詰の支払いがなされていない事実に気づいた客は私以外
 にもいただろうけれど、真後ろの人間がそれをとがめなかったのであれ
 ばおなじ罪を犯したに等しい。無鉄砲さとは、つまりそうした秘密の共
 有でもあって、数年ぶりに再会し、「なんとなく」連れてこられたアヴラ
 シシユの付近で私を感じていたのも、その時の気持ちによく似ていた。

(432)

その意味で、ヤンの個と私の個は完全にぶつかっていないのかもしれ
 ない。「なんとなく」接触する部分があっても、そこから先の衝突が起こ
 っていない以上、私が大切に思ってきた貝の火は、種類をたがえて燃え
 ていたのかもしれない。

(446)

話す必要のないことを「なんとなく」相手に話させて、傷をあれこれ
 さらけ出させるような輩は、素知らぬ顔の冷淡な他人よりも危険な存在

なのではないだろうか。ヤンとのあいだに、いまも小さな貝の火を共有
 しているという想いが私にはある。ヤンのほうでもそれに似たような譬
 え話をしてくれたことがあるから、こちらの存在が鬱陶しさや不快感を
 催させているわけではないだろう。

(456)

といったような、「なんとなく」という接し方で接する方法で、それ以上深
 まりもしなければ離れて行くわけでもない。

さまざまこと、彷徨すること、あるいは漂泊すること。私の小さな現
 実においては、過去に命のかかった逃亡などありはしなかったし、また
 これからもありえないだろう。どこかへ出かければ、かならず出かけた
 ところへ戻ってくる。パリからこの村へ移動したあとふたたびパリに戻
 り、さらには東京へ戻る。私はつねに、そのたびごとの私の家にいる。自
 分自身の行動をコンタクトプリントしながら見晴らしよく回顧すれば、そ
 れらはすべて往還であって漂泊ではないことが明らかになるだろう。そ
 の意味で、ヤンの個と私の個は完全にぶつかっていないのかもしれない。

(446)

ここには「停泊」と「漂泊」という問題がある。本来帰るべきところは
 家であるが、ヤンの場合にはパリに停泊しているのである。ユダヤ民族は
 さすらっている。さすらっている以上、群れる必要がある。弱い民族とい
 うものはあるいは他国において、同族のものほどここで群れるという行為
 をしている。群れることによってお互いが勢力を伸ばしていく。そして他
 国において一大勢力を保っていく。ヤンと私には、「帰る」ということにつ
 いて大きな認識の相違がある。ヤンは「停泊」「漂泊」といった生き方であ
 るのに対し、私は「往還」といったほうがよい生き方である。そのような

二人はつかず離れずといった友情を保っているのである。ある意味では理想的な友人関係といってよいかと思う。また、

だがあれこれ思い返してみると、私たちの会話は、日常のくだらない話以上に、「なんとなく」胸につかえるような話題をめぐって言葉が費やされることのほうが多かった。むしろそこに私の乏しい会話力が関係していたことは否定できない。出会ったばかりの頃、ヤンは私に対してなるべく修飾句を省き、情報を絞って本質だけを口にするような心がけていた節があるからだ。にもかかわらず、それが習いになっていつもあいだが飛ぶような話の展開になったとは言い切れない。言葉の流れはたしかに私たちから自然に湧き出ていた。

(456)

といったように、それに加えて私の会話力の乏しさが、人間関係を円滑にしている。ただただしだけに「なるべく修飾句を省き、情報を絞って本質だけを口にする」ため、本質に迫った、自分の実感に基づいた発言ができたのである。「なんとなく」と「ただただしさ」これが、ヤンと私の接触のあり方なのである。

五 ヤンの撮った写真

ヤンが写した写真には奇妙なものが多い。「大きな石の壁」であったり、「石切場」であったり、「古家の漆喰にできた傷」であったりする。その中でも特に注目されるのは、「薫製小屋」の写真と、「ノルマンディー上陸五十周年の記念演劇祭のとき」の写真と、「赤ん坊をとらえたスナップ風」の三葉の写真である。そのうち「薫製小屋」の写真と「ノルマンディー上陸五十周年の記念演劇祭のとき」の二葉の写真は、ユダヤ人虐殺を暗示する

写真であり、後の一葉は全盲の赤ん坊の写真である。これらの写真には、ヤンの秘められた深い思いがある。ユダヤの問題については祖母へと繋がる思いであり、全盲の赤ん坊については「見る」ということへの本質的問いかけである。私はヤンのそれらの写真について注意深く関心をむけている。いわば、ヤンの心の奥を覗き込んでいたのである。

カトリーヌにもらった珈琲を飲みながら、閉まっていて見学することのできなかつた石切場の写真を中心に、ヤンの仕事を解説つきで見せてもらった。被写体選ばれているのは、太陽熱で干し草を発酵させるために黒いビニールシートをかぶせ、重石がわりにおびただしい数のタイヤが乗せてある不気味な黒山の連なりであったり、古家の漆喰にできた傷であったり、シールド作りのための林檎をつぶす石の圧搾機であったり、国道で立ち往生したシックスティーン・ホイラーであったり、彼らしいといえはまさしくそうと頷くほかないようなものばかりで、自然の風物や戸外に放置された物の写真が大半を占めていたが、アヴランシユのダンス・スタジオで出会ったアルメニア人の双子の少女や、厚いシヨールにくるまってベンチでじっと黙している老婆、海辺の流木のわきで寝そべっている浮浪者など、人間を写したものもかなりある。どれか一枚、気に入らないのでいいから譲ってくれと頼んでみると、ヤンはながいこと未整理の写真をまとめた箱をいじりまわして、奇妙な木造の小屋の写真を引き出した。板を横に渡した外壁に小さなガラス窓が四つ等間隔に配されていて、草の生えた地面と接する土台部分に粗末な板切れでこしらえた三段の柵があり、そこに土管と土管をつなぐ、ちようど人差し指の先を曲げた形の大小さまざまな接続部がずらりとならんでいる。

雨ざらしだからどれも風化して表面がぼろぼろになっているのだが、い
ちおう口の向きを揃えてあるので、疲れ切った男たちが背中を接して隊列
を組んでいるようにも見えるし、画面手前に写っている真新しい四本の有
刺鉄線のせいで縦横の軸に漸近線が引かれているようにも見える。(中略)

「四つの窓は、押し開いたり引いたりするんじゃないかと、上げ下げする特
殊なつくりで、そのむこうにあるのは独房だ」

「収容所を連想させるってことか?」

「そうだ」

「土管はガスを吐き出す口、あるいは火葬場でもある、と」

「なるほど……:そうとも言える。でもぼくがそんな馬鹿げた想像をして
しまったのは、この有刺鉄線のせいなんだ。現像してはじめてそこに有
刺鉄線が張られていることに気づいたんだから、ずいぶんいいかげんな
ものだけどさ。ともかくこの写真はきみにあげる。というか、捨てるの
も嫌だし、持つてるのもいやだね。立場が逆転しちゃったけれど、こち
らから頼むよ。もらってくれないか」 (442~443)

祖母の一族は十六人いて、戦後も命があったのはわずか四人さ。彼女
が生き残ったについては、もしかすると〈漆喰工〉みたいな魔法の一語
が関わってるんじゃないかともぼくは思う。おばあちゃんは菓子職人だ
ったからね、パンも焼ける。そして、収容所みたいな所でもひとはパン
なくして生きられない。:(中略):

小屋の写真一枚からヤンがなぜこれほど熱くなるのか、正直なところ
私は戸惑っていた。たぶんに芝居があった行動をすることもあった二十
代の頃の悪い癖が再発したのではないか、自身の饒舌に酔っているのだ

はないかと。しかし言葉の勢いとは裏腹に、ヤンの表情は終始穏やかで、
そこにはたしかに時の流れが刻まれていた。角砂糖をがりがり噛みなが
ら彼はつぶけた。 (444)

「それと似た状況をボスニアで見た。きみと会わなかった時期に、じつ
はボスニアに行つて来たんだ。迫害があり、レイプがあり、強制労働が
あるといわれた現実を自分の目で確かめたくなくてね。言っておくけど、
センプルンを読む前だよ。アヴランシユの慈善団体を通じて、現地語の
できる女性と戦禍の町へ取材に出かけたんだ。ただし写真機は持つてい
かなかつた。撮影しても仕方がないと思つてね。この目で確かめたかっ
たんだ。ぼくらが入つたのは境界地域で、ついこのあいだまで行き来し
ていた村の子どもたちが川を隔てて敵と味方に別れ、その川を越えて遊
んだというだけの理由で射殺されたりしていた。 (445)

「妙な木造の小屋」板を横に渡した外壁に小さなガラス窓が四つ等間隔
に配されていて、草の生えた地面と接する土台部分に粗末な板切れでこし
らえた三段の柵があり、:(中略):疲れ切った男たちが背中を接して隊列
を組んでいるようにも見えるし、画面手前に写っている真新しい四本の有
刺鉄線のせいで縦横の軸に漸近線が引かれているようにも見える。」の写真
についてであるが、とくべつなにも考えずに撮つたものであるにもかかわ
らず、ユダヤ人強制収容所を連想させる写真である。それは、祖母への思
い、現在目の当たりにしているボスニア内戦への憂いへと繋がっている。

このような写真に深い関心を示したからこそ、ヤンは私にいろいろ語つ
てくれたのである。もし私がおせっかいらしく聞き出そうとしていたなら、
もしかすると、「敷石を投げつける熊」の立場になつていたかもしれない。

ヤンの写したそれらの写真の中にはヤンの心が滲みでている。その写真を私が入念に見ることによって、ヤンは初めて、自分の過去のこと祖母のことを語り始めるのである。それは強制された語りではなく、自らの自然な語りである。聞きたいという興味だけを前面に出してヤンの心に一方的に入っていったとすれば、ヤンはおそらく私から遠ざかったであろう。私が強いついて示すことにより、ヤンは語り始めたのである。私はある距離を保ちながらヤンの言葉に聞き入っている。もし、ユダヤ人虐殺の事実を少しでも聞きだそうとする意図が透けて見えれば、ヤンは口を噤んだであろうし、祖母についても多くは語らなかつたであろう。図々しく立ち入って聞こうとしたならば、もしかするとおじいさんを殺した「熊」の立場に立っていたかもしれない。日常生活において、自分が「熊」なのか「おじいさん」なのかということを経えず意識しておかなければなるまい。

人は秘密を持つている。話したくないこともたくさんある。ヤンは写真によって、それらを暗示的に語っているのである。祖母自身は辛い体験をヤンに語ってはいない。ヤンは両親から聞いたことを基にして祖母のことを深く思うようになっていく。祖母自身あまり語らないのには理由がある。祖母が頑なに自分の体験を話さなかつたのは、自分は助かつたけれども多くの人たちはなくなつてしまつたという負い目からであろう。ヤン自身も、祖母とは距離をおき、お母さんを通して祖母のユダヤ収容所の話を聞いたのである。どこまで他人の心の中に入つてもよいのか、常に距離を持ちながら、人間関係をつくつていかななくてはならない。個人の問題・社会の問題・国家の問題等いろいろと考えさせられる。そのような距離をもつて付き合っていく関係を、この「熊の敷石」という作品は暗示している。ヤン

の撮つた写真を一枚一枚よく見てみると、ヤンの痛切な思いが伝わってくる。ヤンは奇妙な写真を多く撮り続けているが、それら一枚一枚の写真にはヤンの深い思いが込められているのである。

次の写真は「ノルマンディー上陸五十周年の記念演劇祭のときの写真」である。

私はまたテーブルに戻つて写真を手に取つた。古い家屋や納屋の粗い木の板がいびつにながつている扉の写真が何枚もつづく。…(中略)…夜の野外劇をとらえた連作が出てきた。舞台中央でうずくまる中年女性を抱きかかえた演出家らしい男の姿が、スポットを浴びて映し出されていた。

「ノルマンディー上陸五十周年の記念演劇祭のときの写真だ。きみの好きなアヴランシユの広場さ」

「べつに好きでもないよ、まだちゃんと見学すらしていないんだから」

「そうだった。とにかくアヴランシユ市が、ある劇作家にオリジナル脚本を依頼したんだ、町を舞台にした作品をお願いしますってね。劇作家はそこで古くから住んでいる人々にインタヴューを重ねて、得られた実話をもとに脚本を完成させた。それを彼の劇団が演じたときの様子だよ。しかしきみがこれを抜き出すなんて妙だな」

「どうして？」

「嫌でもさっきの話につながつてしまうからさ。その脚本の主題は、アヴランシユに住んでいたユダヤ人一家の物語なんだ。…(中略)…エステル、今日の劇は、きみのためのものだ、と。彼女は立ちあがることのできなかつた。感想を差しはさむこともできなかつた。彼女にとってその

女優は、母親そのものだったのだ。連合軍のノルマンディー上陸と同年のおばさんとなったかつての赤ん坊は、演出家の胸で泣き崩れた。たまたま友人が劇団にかかわっていたためその場に居合わせたヤンもまた、言葉を失ったままシャッターを切りつづけた。私が手にしていたのは、この時の写真だった。…(中略)…最初の一枚はヤンを選んだにせよ、収容所にゲシュタポと、偶然にしては出来すぎの重石を取り扱うべつこの光と闇が欲しかった。

(447)

この演劇祭の写真は、一見平和そうに見えるのであるが、ユダヤ人虐殺の思いへと繋がっている。多くの人を戦渦に巻き込んだ時代の狂気、ヤンの写真の一枚一枚には、ヤンの切なく悲しい思いが潜んでいるのである。ヤンの写真の奇妙さは、その深いこころの傷から発せられた叫びなのである。

三葉目の「全盲の赤ん坊」の写真について見てみる。

私はなおも写真の束を手に取り、やがて生後一年ほどの愛らしい赤ん坊をとらえたスナップ風の写真を見出した。柔らかそうな毛糸の、手編みのカバーがかかったソファのうえで、大きな目を閉じてやすらかに眠っている、通俗にすぎてふだん母国語では口にするこもはばかられるあの天使的という形容がぴったり、幸せそうな寝顔。産道を通らなから肌にも異物が付着しない帝王切開で生まれた赤ちゃんのつやつやした頬を連想させる、この世を超えたやわらかな皮膚にその子は包まれており、技術的な問題はわからないけれど不思議にほっとする加減の光を身体中で受けとめていた。敵とか味方とか、そういう宿命的な煩雑さがまだ理解の外にある顔だった。…(中略)…

「ダヴィッドっていうんだ。全盲っていうって、視力がないんじゃないか

て、先天性異常で眼球がなかった。ダヴィッドは、だからきみの讚えるその光を見たことがない」

私はもう一度、大きな熊のぬいぐるみにもたれ掛かっている赤ん坊の濃い睫毛を見つめた。眼窩のくぼみがさほどでもないせいだろうか、ヤンが教えてくれなければ、この子に視力が与えられていないことなど気づきもしなかったろう。だが瞼の裏側には誰よりも深い闇がひろがっているのだ。

(448)

私は写真のなかのダヴィッドをなおしばらく凝視した。やがて画面に漂っている平安に感化されて見落としていたその「なにか」に気づいて、思わず声をあげそうになった。熊の目が、ぱつ印で閉じられていたのだ。鼻も口もある動物の顔のなかで、目だけが糸を交差させたりげない措置で封印されていたのである。その目のおかげで、熊はダヴィッドを庇護しつつ同時に庇護されているような両義性を獲得していたのだ。

(449)

「熊の敷石」には、熊が三度出てくる。一度目は夢の中の熊であり、二度目はこの写真に写っているぬいぐるみの熊である。三度目は、「ラフォンテイーヌの引用」の中にある敷石を投げつける熊である。

この写真の熊の目は、持ち主である全盲のダヴィッドを意識して「ぱつ印で閉じられていたのだ。鼻も口もある動物の顔のなかで、目だけが糸を交差させたさりげない措置で封印されて」いるのである。見えないことによつて見ることができないもの、見えているつもりが見えていない。これは「熊の敷石」のテーマとも関連している。「見る」ということについて考えさせられる写真である。またこの写真の中にも、平和なうちにもそれを壊

すような危機が潜んでいることが見て取れる。それは「夢と現実」のところでも見たように、「安心のうちの不安」「平穩のうちの不穩」といったところと重なっているといつてよいかと思う。印象に残る一葉の写真である。ヤンの写したどの写真にも、一見平和そうに見える状況の下に、深く悲しい闇が広がっている。

六 くだらない冗談・宗教と思想

「つまらない冗談」が人間の運命を変える場合が人生には多々ある。改宗にしても、捕虜收容所の出来事にしてもしかりである。しかし、本来深刻な問題が、ちよつとした距離を置くことで、「くだらない冗談」と化し、それによつて救われることもあるのである。「つまらない冗談」として上げられている例を本文中から抜き出しておく。

ヴィルは街、デューは神、レ・ポワルはフライパンだから、むかし神様がフライパンで食事を作った街なのかな。私が冗談を言うと、ポワルはポワルでも銅製ですよ、なにしろ古くからある銅製品の産地で、銅じたいは採れないにしても、フランス中の教会の鐘を鑄造しているので有名なんですから、といたつてまじめに説明してくれる。(427)

家族の会話のなかで、私はこんな話を聞いたことがある。先祖のひとりか——その、父親たちも、また子孫たちもおなじく金銀細工師だったのだが——、大天使ミカエルに倒されたサタンの凶柄をあしらつた銅製品を一式修理するため、僧院に呼び出された。善良なこの男は、検査が終わると、僧侶たちにこう言った。「悪魔の方はよろしいのですが、大天使のほうはなんの値打ちもありません」と。不幸にも、彼はユグノー

だった。その言葉が誤解され、不安になり、懼れをなしたわが祖先は、とうとう改宗してしまつた。このときから、一族はカトリックになつたのである。改宗なんて、いつたいなにが原因で起こることか！先祖の不運な、くだらない冗談がなければ、これらの人々はみなユグノーのまま、永遠に呪われていたわけである。(438)

「センプルンはブーヘンヴァルト收容所に二年間拘束されたんだ。他の人々と同様、解放後は一度もそこへ戻つたことがなかつた。ところがドイツのジャーナリストの招きで、現在は博物館として保存されている收容所跡を四十七年ぶりに訪れるんだよ。ゲータの町でもあるワイマールの文化の、表と裏を見つめるドイツのテレビ番組の一環として、現地でインタヴューを受けてほしいという申し出に乗つたのさ。その物語のクライマックスに置かれているのが、まさに「くだらない冗談」といふかない運命のいたずらなんだ。そこまでの展開にはあまり感心しなかつたけれど、そのエピソードは強烈だつたね」(439)

ところが、收容所跡の博物館につとめている男がそこで驚くべき事実を明かしたのだ。センプルンの愛読者である彼は、この日に作家がやってくることを聞きつけ、完璧に残されていた記録文書のなかから一九四四年一月の囚人カードを探しだし、そのコピーを持参してきたのである。そこに書かれていたのは学生の《Student》ではなく、漆喰工を意味する《Stuckateur》という単語だつたのだ。学生云々をめぐる言い合いが先入観となつて、頭三文字が共通する、つごうのいい単語を一瞥のなかで読み誤っていたのだらう。センプルンが送られてきた翌月、過酷な労働を課す別の收容所へ囚人をまわすための選別が行われたのだが、彼はこの

単語のおかげでブーヘンヴァルト内の仕事に従事可能な熟練工と見なされ、命拾いをしたのである。

「囚人登録証の職業欄に書かれたひとことで人生が決まったとすれば、これはもう悪い冗談だよ。天使がどうの、悪魔がどうのって、なにが辛いするかわからない。ユグノーのままでいたら、宗教戦争だの弾圧だの、厳しい歴史をくぐりぬけて来なければならなかった。カトリックなら安全というわけでもなかっただろうけれど、相対的に安全な道へ進むことのできた直接のきっかけがつまらない冗談だったんだ。漆喰工そのものが冗談めいた職業だと言ってるんじゃないよ。でも結果としてこの意図的な書き込みが彼の命を救ったのだとしたらじつに皮肉なことだと思うな。リトレの祖先にしても、信者や僧ではなくて手に覚えのある金銀細工師だったから大目に見られたんだらう？」 (440)

「そんなふうには思っていないよ。明日の準備もあるだろうから、つづきはきみの家で話すことにして、そろそろ出よう。ここは払わせてくれ」

「きみが払う？ そういうのを命に関わらない冗談って言うんだ。ほくが払う」

「腹が減ったと騒いだのはこっちだからいいんだよ。そのかわり、お願いがある」

「お願い？」

テーブルのうえに置かれている、ふたりでひとつ割り当てられた小さな陶製のバター入れを私は指さした。白地に青で地元の製造会社のロゴが転写してあるその容器には蓋がなく、バゲットといっしょに出てきたときには口が銀紙で密封されていたから、たぶん既製品なのだろう。

以上であるが、本当に「つまらない冗談」である。単に「つまらない冗談」である場合もあり、人間の運命に関わる場合もある。

ところで、宗教と教養との関係が気になるところがある。リトレの生涯に関する記述の箇所である。

リトレ一家は十三世紀の昔から完全に無宗教で、神も悪魔も信じておらずミシエル・フランソワもまったくの無宗教のなかで育てられた。一方、妻のほうは、革命には殉じる気があってもまだプロテスタントとして神を信じていた。問題は、生まれてくる子どもを洗礼するかしないかである。一八〇一年、パリに生まれた長男エミールは、父親の意向で洗礼を受けないことになり、彼は死ぬまでその立場を守った。夫婦は、宗教よりも深い教養を身につけさせるという一点で合意していたのである。 (450)

科学に惹かれながらも人間の問題を捨象するような学問は好きになれず、しかも数学的才能に限界を感じていたリトレにとって、双方を満たす道は医学しかなかった。 (450)

「熊の敷石」の作者はフランス文学者で翻訳等を手掛けている。その意味で「私」というのは作者の分身と言ってもよい。人名辞典によるとエミール・リトレは実在の人物である。リトレは無宗教である。宗教を持つことによって、ある意味では不自由になると考えていたからである。宗教を持たないということは当時にあつては珍しいことである。教養と宗教・思想を対等に並べていく考え方は大変現代的な考え方である。例えば三島由紀夫について言うと、神道や仏教に強い関心はあつたものの、最終的には無

宗教である。無宗教ではあるが大変な教養を身につけている。森鷗外とか大江健三郎とかもそれに当たる。この神社に、このお寺に、この教会にというふうな特定の神社やお寺・教会というものはもっていない。宗教は絶対的なものではなく、強い関心の対象とみなし、それを教養として身につけている。宗教に強い関心があるといても、ひとつの宗教にこだわることではない。それらを絶対的なものとせず相対化しようとする視点がある。宗教というものは信じ切ることが出来れば楽であるが、信じ切ることができなければ苦悩を伴う。多くの作家は、ひとつの宗教を信じ切ることができず、その苦悩を作品化している。宗教・思想というのは、信じることができれば一つの生き方が決まり、宗教・思想以外に他の解決方法を目指さない。宗教によって病気が治るといえることがよくあるが、自分の気持ちを集中することによって自己暗示力を高め、そのことにより自然治癒力がわくからである。信じることができないものは多くは、苦悩を抱えることになる。宗教を相対的に見ようとすると人は苦しみにとらわれる。思想と宗教の違いは、生命の永遠性を認めるか認めないかということにある。思想と宗教は信じることによってその根本が明かされる。教養は信じるものではなく、知識を豊富にすることによって得られるところの安定である。その点が宗教・思想・教養の違いである。思想・宗教・教養は似て非なるものである。

現代の社会を見ると、ヘルツェゴビナやボスニア、宗教をめぐる紛争は大変根深く、民族同士の争いとなつていく。宗教への考え方の違いが戦争を引き起こし、世界を大きく変えていく。リトレの両親が、リトレに「宗教よりも深い教養を身につけさせるといふ一点で合意していた」のは、当

時としては画期的な考え方であったと思われる。

他人の命を奪ったとしても、ただ自分の信仰する宗教は大切にされる。キリスト教を広めるために全世界を占領していった、十字軍の遠征等はそれが最たるものである。宗教において、国と国が争うというのは現代でも同じである。

宗教性があつても宗教そのものではない。宗教性と無宗教とは違う。大江健三郎は無宗教であるが、宗教性はある。宗教を信じる人よりも宗教性でもって、宗教を超えるということはあり得る。何かによつて、一方が進歩し一方が遅れているように思うし、また一方がよくて一方が悪いという結論を出してしまう。どちらも正しいという立場に立ち、ものを見て行くのが宗教性であろう。一方を正しいとし、その方向に変えなくてはならないとむやみやたらとお節介を焼く。本来は共存しなくてはならないものを、一つの価値によつてそれを統一してしまうとする。ある思想・宗教によつて他の民族を支配しようとする。この作品にある問題点は個人の問題であると同時に国家民族の問題でもある。

どこまでこの作者が認識しているか分らないが、少なくとも作者は、一つの価値によつて一つの価値を押しつけたり、あれこれといらぬお節介をやくことを否定している。この思想がいい、この宗教がいいといつて、一方に偏つてしまふのは大変危険である。すべてを認めあう共生的な生き方、これこそ平和の源である。親切のつもりでいろいろとお節介をやり、強く主張するというのは迷惑千万な話である。とにかく親切の押しつけは避けなくてはならない。接し方によつては、相手を殺してしまうことになる。カマンベールチーズであれば冗談で済むところが、敷石を投げるることによつ

て相手を殺してしまうのである。その様な悲劇が現実にはよくある。

七 「熊の敷石」と、あるべき人間関係

「熊の敷石」のテーマに正面から触れている箇所がある。少し長くなるが引用しておく。

最初に掲げられているラ・フォンテーヌの引用に釘付けになった。

忠実な蠅追いは敷石をひとつ摘むと、それを思いきり投げつける。

蠅を殺すためにわざわざ重い敷石を投げつけるとは、いったいどういう状況なのか。そして、石を投げたのはいったい何者なのか。(452)

ある日、熟睡している老人の鼻先に一匹の蠅がとまり、なにをどうやっても追い払うことができなかった「忠実な蠅追ひ」は、ぜったいに捕まえてやると言うか言わぬか、「敷石をひとつ掴むと、それを思い切り投げつけ」、蠅もろとも老人の頭をがち割ってしまったのである。

かくして、推論は苦手でもすぐれた投げ手である熊は、

老人をその場で即死させたのだ。

無知な友人ほど危険なものはない。

賢い敵のほうが、ずっとましである。

この訓話が転じて、いまではいらぬお節介の意味で「熊の敷石」という表現が残っているのだが、いかに教訓を引き出すためとはいえ、熊が

蠅を殺すために重い敷石を投げつけ、同居人の頭蓋を叩き割るなどという血なまぐさい状況を、十七世紀の詩人はどんなふうに見たのだろうか。孤独な動物と老人が出会うのはいいとして、老人が庭いじりを趣味としているのでなければ敷石など手近になかったろうし、動物が熊でなければそれを軽々と持ち上げて投げつけることもできなかったろう。しかも両者の仲介をするのが、放っておけばいつかは飛んでいったにちがいない、小さな蠅一匹なのだ。すぐれた投げ手に持たせるのは、それこそカマンベールでもよかったではないか。チーズの匂いは蠅にも心地よいはずだし、頭にあたってもたいした怪我などなくてすむ。もっとも、石を投げずにその強靱な腕で振り払ったとしても、力ない老人を殴り殺すことになつていたかもしれないのだが。

お節介をたしなめるにはあまりにむごい展開が、無知な友人ほど危険なものはないとの結びの教訓に対する私の意識をしばし鈍らせた。もしかするとヤンにとってこの私は、ラ・フォンテーヌの熊みたいなものだったのではないか。話す必要のないことを「なんとなく」相手に話させて、傷をあれこれさらけ出させるような輩は、素知らぬ顔の冷淡な他人よりも危険な存在なのではないだろうか。ヤンとのあいだに、いまも小さな貝の火を共有しているという想いが私にはある。ヤンのほうでもそれに似たような譬え話をしてくれたことがあるから、こちらの存在が鬱陶しさや不快感を催させているわけではないだろう。だがあれこれ思い返してみると、私たちの会話は、日常のくだらない話以上に、「なんとなく」胸につかえるような話題をめぐって言葉が費やされることのほうが多かった。むろんそこに私の乏しい会話力が関係していたことは否定で

きない。出会ったばかりの頃、ヤンは私に対してなるべく修飾句を省き、情報を絞って本質だけを口にするような心がけていた節があるからだ。にもかかわらず、それが習いになっていつもあいだが飛ぶような話の展開になったとは言い切れない。言葉の流れはたしかに私たちから自然に湧き出ていた。エミール・リトレとホルヘ・センブルンが、潮の引いたモン・サン・ミシエル湾さながら、ふだんは見えない遠浅の海でどこまでも歩いていけるような錯覚のうちに結ばれ、リトレの辞書から今度はラ・フォンテーヌへの飛翔を準備するというように。しかし、と私は思っていた。実際には、互いに互いの見えない蠅を叩きあっているのではない。投げるべきものを取りちがえているのではないか、と。敷石を投げたりしない熊とつき合えるのは、いま隣で読めるはずのない布製の絵本を撫でている、眼球のない天使だけだ。

(456)

この場合、熊は自分の利益のためではなくおじいさんのために蠅を払おうとした。何度払っても蠅は逃げない。おじいさんは蠅のために大変寝苦しそうである。おじいさんのことを本当に気の毒に思い、熊は敷石を投げ付けることによって、蠅を殺そうとしたのである。その結果おじいさんが死んでしまった。おじいさんと熊はどちらも孤独で、熊はおじいさんのためにおじいさんのためにと一心から蠅を払おうとした。熊はおじいさんに対しなんとか親切にしようとした結果、お節介のしすぎということになってしまった。悲しい現実である。敷石を投れば、おじいさんがどうなるかが分かっておれば、熊は敷石を投げることはなかったはずである。熊は無知がゆえに、おじいさんに敷石を投げたのである。「いらぬお節介」というのは、多くの場合、無知なるがゆえに相手を傷つけてしまうのである。

そのことにしか考えがゆかず、一番いいと思っただけが実は相手を一番傷つける結果にもなる。親切にすればするほど相手はあり難く思われると思うのであるが、無知なるがゆえに相手は大迷惑するのである。近い人間関係においてこのようなことがよくある。本人は一生懸命であるにもかかわらず、その親切が返って迷惑なのである。多くの場合迷惑であるにもかかわらず、その親切に対していやだと言えないのである。それが相手への優しさでもある。距離のない一方的な優しさや親切さは、「いらぬお節介」である。そこには距離が必要である。他人を思うあまり、当の本人は親切そうに心の奥の問題にまで踏みこんで来て、そういう時、案外人を傷つけていることになる。殺人は起こらないにしても、相手の心を傷つけているということについて、はつきりとした意識を持たなくてはなるまい。親切ゆえに人を傷つけ、相手を悩ませる。

電車の中で出会った男の子は、自分勝手に他人のことなどあまり考えていない。無頓着である。子供だから許されるのであって、もしこれが大人の人の行為であれば許されるはずはない。本人は良いのかもしれないが、他人にとってははなはだ迷惑なのである。ツアーなどでよく経験することであるが、そっとしておいてほしいにもかかわらず、聞くことが話しかけることが他人への親切だと思ひ、あれこれと細かに話しかけてくる人がいる。これもお節介のひとつである。本来ならば、適切な距離が必要であるにもかかわらず、距離を保てず過度に親切にすることが、実は人間関係をダメにしていくのである。多くの場合、無知ゆえにその距離が取れなくなっているのである。あまり広くとり過ぎていいけないし、狭すぎて人間関係は壊れてしまう。

※

では、好ましい人間関係とは、いったいどのような人間関係であろうか。一種の岬のうえにぼつんと止まった小さな町で、そこからは、林檎の花が咲く頃に見なければならぬ魅力的な地方を睥睨しつつ、正面にモン・サン・ミシエルの僧院と、ひと気のない砂州が見える。挑発するように海に投げ入れられた、この時代がかつた賞嘆すべき花崗岩の建物の効果はじつに堂々たるものだ。海は一日に二度、唸りをあげる潮で僧院を取りまきに来る。

(435)

潮があつというまに僧院を取り囲み、陸地との連絡路は完全に断たれて、海に屹立する奇岩城の趣を呈する。アヴランシユからの眺めは絵になる真南からの映像とちがって東の面になり、しかも相当な距離があるので、それこそ「投げ入れられ」たほどの大きさにしか見えないはずだ。

(435)

私たちが立っているのは、海面から三、四十メートルほどもある切り立った崖の先端だった。手すりもない自然の展望台が一面の夕陽を浴びた海にむきあい、海面には地を這う泡のような、茶色く薄い潮が細波をつくって、前方右手に見えるサン・マロの城塞都市まで直線距離にして十五キロほどを一挙に引いていく。

(436)

ここで、僧院のある島について考えてみる。僧院のある島は、満潮の時には陸から離れ、干潮の時には陸続きになる。なんでもない風景に思えるかもしれないが、この風景は、人間関係を考えるとき、象徴的な風景となっている。満ち足りているときには孤立し、何か欠けているときには相手を求め繋がっていく。まさに人間関係そのものと言ってよい。自分自身満

足しているときには、相手からの余計な親切は必要でない。苦しんでいるとき悩んでいるときにこそ相手からの援助が必要である。その援助にしても、一方的に親切にするのであれば、相手にとっては苦痛を増すことになる。島と満ち潮引き潮の関係こそが、そして距離をもって接することが、人間関係において一番大切なことと言える。二等辺三角形の頂点あたりの距離が一番適切である。一方に偏った距離ではだめである。一方に偏った人間関係においては、付き合っていくうちになんらかの歪みを生じ、最終的にはその人間関係は壊れてしまう。現代に必要な人間関係は、まさに相手との距離であり、僧院のあるこの島と潮の満ち引きの関係は、まさにあるべき現代の人間関係の象徴ということが出来る。

宇野 憲治(言語文化学科日本語文化コース)
(二〇〇五・一一・二一 受理)